

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

小林秀雄批評の哲学的分析
——ベルクソン哲学の視点から——

氏 名

川里 卓

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、ベルクソン美学・哲学と比較した、小林秀雄批評の特徴を明らかにすることである。

本論では、合理的な分析に先立って存在するあるがままの事実を、「無私」の精神とともに示す芸術家の心理過程を提示することに、小林批評の特徴があることを次の三点の考察を通して明らかにする。まず、ベルクソン美学と比較した小林独自の美学である。それは芸術家が作品を制作する側面を強調するものであり、「意識に直接的に与えられたもの」を描写するというものである。この意識に与えられたものを「言葉」や「色彩」という道具を用いて再構成するところに、芸術家の「信」があると小林は言う。次に、「無私」の精神と「実在」の関係である。「無私」は知的な分析を通して対象を眺めるのではなく、対象のあるがままの姿を批評で示すものとして小林は捉えている。最後に、創造の根底に「感動」ないしは芸術家の意識を超えたものがあるという点である。まず芸術家の意識を超えた何かが与えられ、それをもとに芸術家は作品の制作を始める。以下、上記の三つの内容を、本論の構成に沿って説明する。

第一部では、ベルクソン美学を「持続」、「記憶」、「実在」そして「神」という観点から検討する。ベルクソンの言う「実在」とは、物質の振動が身体的次元で保持された先に現れる知覚像のことである。芸術家が認識するのは対象の実在であるが、通常認識は実生活に向けられる注意という「ヴェール」によって限定され、対象のあるがままの姿を把握することが少ない。芸術家とは「自然」の働きによって「有用性」から「離脱」した知覚を与えられ、神の善意と自らの意識を一致させることが出来る能力を持つ人々のことである。キリスト教においては、全てが神によって創造されたものであるとされる。それゆえ、神による創造物であるそれら対象のあるがままの姿を認識することが出来るならば、そこに同時に神の啓示を読み取ることが出来る。一方で、キリスト者でない小林は、「神の善意」というキリスト教的文脈を外してベルクソン美学を受容している。

第二部では、ベルクソン美学を小林がどのように受容し、自身の批評に用いているのか

を、彼のランボー論とセザンヌ論を参考に検討する。詩人は、「未知のもの」を表現するために、通常の認識の枠組みを放棄し、「あらゆる感覚の乱用」とともに自身を超えた力に身を委ね、そこから詩を構築する。この場合、次の三つの点を区分することが出来る。まず、日常の認識、次に「未知のもの」に至ろうとする努力(「あらゆる感覚の乱用」)、そして日常性を超えたものそれ自体(「未知のもの」)である。小林によれば、「未知のもの」の表現は詩人に「強いられた問い」である。すなわち、詩人は自身を超えた問題を与えられ、その表現を「新たな言葉の発明」とともに行う。ランボー論における小林の中心的解釈は、「未知のもの」を把握するために詩人が言葉を自ら再構築し、主体(詩人)が積極的にそれを把握する点にある。ベルクソンが芸術家の認識に「神の善意」が現れると考えるのに対して、小林は詩人と哲学者を同じものと見なしながら、制作者が主体的に「未知のもの」ないしは対象の「実在」を掴みに行く姿勢を重視している。

また、セザンヌ論において小林は、詩人リルケを取り上げながら、「存在するもの」それ自体がセザンヌの絵画に描かれている点を強調する。小林によれば、「見識や反省」という知的解釈を離れ、色彩の組み合わせを工夫することによって、「存在そのもの」を表現することが可能になる。絵画を描く際には、色彩以外の単位は必要ではない。絵画は「面という色の単位」の積み重ねから成り立っており、それが対象そのものを構成すると「信じる」ところに、セザンヌの絵画に対する姿勢があると小林は言う。すなわち、色彩とそれが画面全体を構成する関係性に、セザンヌにおける「信じる」行為が存在している。ここではベルクソンの意味での神の啓示が人間に現れるのではなく、むしろ「信じる」という宗教的行為が人間の認識に移行している。つまり、芸術家の認識のうちに宗教的な認識が形を変えて現れている。ここにセザンヌの「信仰告白」という宗教的特徴と、ベルクソン美学と比較した小林独自の解釈がある。

第三部では、「無私」の精神と「実在」の関係を、小林のモーツァルトとプラトン論を参考に検討した。「無私」の精神は、モーツァルト論においては「子供らしさ」と言い換えられている。小林のモーツァルト論では、ベルクソンの「実在」の意味が、本居宣長の言う「もののあはれ」に通じる、日常生活で自然に感じる情感に近い意味合いで用いられる。

小林はプラトン論において、意識的な反省や分析によって、精神全体を把握することができないという認識がソクラテスの智慧にあったと言う。小林によれば、それが自己の内部にあるものであっても、自己を超えたものは「信」という精神の働きによって把握される。また、「悪魔的なもの」において小林は、「言霊」という概念を提出し、各々異なる自己を持つ者同士の対話が、一つの統一された形になって現れる点に着目する。各々異なった意見や考えを生み出す根底には、それらを統一しまとめ上げる力と同一の力が働いている。対話篇で各人が独白を行うことを通して、個人を超えたより大きな精神の働きが現れ、そこに各人は語りを通して結びけられる。ベルクソンは『創造的進化』で種と「生命の飛

躍」という区別を行い、部分と全体の関係について検討している。上記の小林の思考と同じ構造を持っており、小林はベルクソンからの影響を明記していないが、ここにベルクソン哲学の影響を読み取ることが出来る。

小林の理解においては、「有用性」を取り除いた視点は、「無私」と密接に結びついている。小林批評における無私とは、対象を特定の観点から眺めない視点のことである。リンゴはその成分の分析をする場合など、様々な観点から扱うことが出来るが、その分析は主に対象を分解する知性の働きによってなされる。これはリンゴのあるがままに見る視点を妨げるものであり、小林が強く批判する点は、この知的な分析を通した解釈である。ベルクソン哲学の枠組みにおいても、「知性」とは対象を空間化し、行動に役立つための認識として扱われている。この点においても小林はベルクソンの認識論を受け継いでいると言える。

第四部では、「個人を超えたもの」という概念を中心に、小林の霧島における講演（ベルクソンと柳田論）および彼のゴッホ論を検討した。ベルクソンは「情動」が新たな創造の場面の根底にあると述べている。ベルクソンはそれを芸術家個人の根底に想定するが、小林における感動は、世代を超えた多くの人々に共有され受け継がれていくものである。小林はこれを柳田国男の『遠野物語』を通して論じている。作品の根底に情動ないしは感動を措定する点は、小林がベルクソン哲学から影響を受けたと想定することが出来るが、ベルクソンが彼の芸術論で述べていない、共同体において共有される感情があるとする点に、小林の解釈の独自性がある。遠野の人々は芸術という言葉を用いていないが、それは共同体によって共有される感情をもとに語られる、個人的創造という近代的な芸術観とは異なる種類の芸術的生活である。

小林によれば、「ある普遍的なもの」がゴッホの精神を通り抜けようとし、それとの格闘を強いられた結果として、ゴッホの様々な作品が生み出されてきた。ベルクソンによれば、哲学者の様々な言説は、原初の直観を表現するために用いられる。根源的な何かと、そこから派生する具体的な作品や思考という関係は、ベルクソンと小林の両者の思考に見出すことが出来る。小林はそのことに言及していないが、そこにはベルクソンから小林への思想的影響関係がある。

小林批評の目的は、作品を分析してそこから独自の解釈を提示することではなく、創造の瞬間における作者の心理過程を批評で示すことである。小林は、芸術や文学作品を、学問的な方法論から批評するのではなく、彼自身の視点を作品で提示される内容と一致させ、そこから批評を構築する。それゆえ、作品を批評することは、芸術家の直観と結びついた自身の直観を洞察することと同義である。小林批評は、デカルト的な「自我」、すなわち対象を眼の前において主体がそれを分析する方法に基づくのではない。それは主体と対象の区分を持ち込むため、「本当の人間の魂」はそこに現れない。小林は主体と対象の区別が取り払われた次元に視点をおき、作者の主観の立場から批評を構築していく。